

英語音読評価に影響する要因—日米評価者の評価比較—

A Comparison of Evaluation of Reading Aloud Performances Between Japanese and American Informants

鈴木 政浩（西武文理大学）、阿久津 仁史（聖学院大学）

飛田ルミ（足利工業大学）

問題と目的

従来英語音読の評価法は、読みの速度を数値化する方法や読み間違いを数えて数値化する方法のように機械的に産出される数値と、人間が音声を聞いて判断する方法に分かれる。一方、音読の評価については、小川編(1982)が16項目の評価基準を提示してはいるが、熟達度との関係を検証していない。Kuhn & Stahl(2003)は幅広く音読の流暢さに関する研究を整理し、評価項目を提示している。これは Kluda & Guthrie(2008)の評価基準とも概ね共通している。そこで本研究は、先行研究から代表的な音読評価項目を抽出し、日本人評価者とアメリカ人评价者による評価の関係を分析し、音読を聞けば学習者の熟達度やテキストの理解度がある程度わかるとする経験的な主張（田垣, 1990: 150 等）をふまえ、日本人評価者による評価の妥当性を検証することを目的とする。さらに日本人評価者の評価と、学習者の熟達度との関係を実証的に検証する。

方法

2008年11月から2009年2月に実施し、関東近県の私立大学生32名を対象とした。

事前テストを実施し、対象者の熟達度を測定した（英検3級2006年度第3回）。初見のテキスト(62 words)を対象者に音読させ、その音声を録音した。音声データを日本人評価者4名、アメリカ人评价者4名が評価した。評価項目は次のように設定した。1) 音読精度（単語の読みの正確さ（Rasinski (2003: 159-160)による）、2) イントネーション、3) ポーズ(phrasing)、4) ストレス。それぞれ評価者間信頼計数を算出し信頼性を確認した。その後、日米評価者の評価における相関を項目ごとに確認した。さらに、日本人評価者の音読評価下位項目と、事前テスト得点との関係を分析した。

結果

評価者間信頼係数は、日本人・アメリカ人それぞれ $\alpha = .86$ と $\alpha = .84$ であった。

まず、項目ごとに日米評価者の評価に関して、その相関を確認した。相関の高さは、音読精度>ポーズ>ストレス>イントネーションの順で、相関係数はそれぞれ $r = .91(**)$, $.70(**)$, $.65(**)$, $.64(**)$ ($** p < .01$) で日米評価者の評価に相関が確認できた。熟達度との相関に関しては、一部の評価項目を除き中程度以上の正の相関を確認した。

考察

評価項目個別の相関には若干の相違が観察できた。日本人評価者の評価項目と熟達度の関係を検証するために、階層的重回

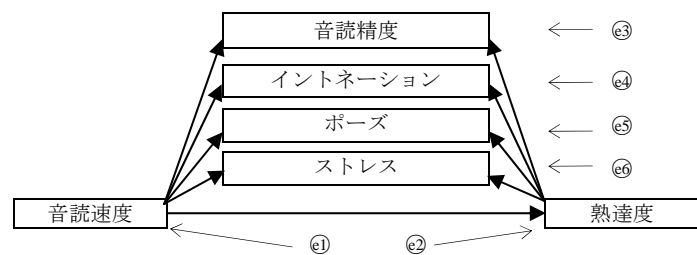


図 1. 音読評価に関するモデル

帰分析のモデル (図 1) を作成してみたが、評価項目ごとの相関が高すぎることから多重共線性が強かったようだ。したがってモデルとしての適合度が確保できなかった。このことは、評価者は 4 つの評価項目を同時に評価する際、全体の「印象」で個別の項目を評価している可能性を示唆しており、評価方法そのものを再考する必要があると考えられる。その他詳しい考察は当日報告する。

引用文献

小川芳男編. (1982). 「英語教授法辞典新版」 三省堂.

田垣正義. (1990). 「落ちこぼれのない英語教育—誤答分析の視点から」 南雲堂.

Klauda, S. L. & Guthrie, T. (2008). Relationships of Three Components of Reading Fluency to Reading Comprehension. *Journal of Educational Psychology*. 100(2), 310-321.

Kuhn, M. R. & Stahl, S. A. (2003). Fluency: A Review of Developmental and Remedial Practices. *Journal of Educational Psychology*. 95(1), 3-21

Rasinski, T.V., (2003). *The Fluent Reader*. Scholastic Inc.